
哀哭

紅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀哭

【Nコード】

N4136B

【作者名】

紅月

【あらすじ】

父から虐待を受け、姉からは嫌われて。そんな中育ってきた12才の少年の話。

その日は月が綺麗な夜だった。

寝付けなかった尚人は部屋のカーテンを開け、月を眺めていた。

寝付けない夜、尚人は必ず月を見るのだ。何も考えず、唯月を見て
いるだけで尚人の心は落ち着く。その日にあつたことを忘れられ、
父につけられた傷が癒えるような気がした。

段々眠たくなってきたので、欠伸をして布団に入ろうとしたら、玄
関のドアが開いた。

尚人の姉が帰って来た。

尚人の姉の名前は雅美。小学6年の尚人とは10才も年が離れてい
る。仕事から帰って来たようだ。

雅美は父とは違い、暴力は振るわないものの、自分を見る目はいつ
も冷やかかで、最近では会話を交わす事も無い。

多分、母親が違うのではないかと尚人は思っていた。

尚人は家族の愛を知らずに今まで育ってきた。

家には、尚人、雅美、父との3人で住んでいて、母はいない。

否、尚人は母親の顔すら知らないのだ。多分それは雅美も同じだろ
う。

父は毎日酒ばかり飲んでるので、この家の家計を支えているのは
雅美だ。

尚人はいつも思っていた。

何故、父や自分が嫌いなのに、家から出て行くことはしないのだろ
うか、と。もう自立できるほどの年で、ちゃんとした会社にも勤め
ているのに、何故この家に居続けるのだろうか、と。

そんな事を考えながら、尚人は眠りについた。

朝7時。いつもならもう少し寝て居られるのだが、今日は父と姉、

雅美の怒鳴り声によって目が覚めた。

「何度言ったらわかるのよ!？」

雅美の怒鳴り声が家中に響く。

「うるせえ! てめえには関係ねえだろ!

さっさと出てけ! てめえもアイツも邪魔なんだよ!！」

酒を片手に父も言いかえした。父の言う『アイツ』というのは尚人のことだろう。

別に尚人はそんな事言われるのは日常茶飯事なので何も思わないが、毎回毎回している口論の原因が尚人には分からなかった。

嫌いなら自分のように話しかけなければ言いのに、何故父には…

などと考え、尚人は少し寂しくなった。

父と姉の口論を聞いていると、学校の支度をしなければならない時間になり、鞆に教科書を入れ、速足で家から出た。

ぐずぐずしていたら、尚人も巻き込まれてしまうから。

学校についてからも、友達がいるわけでもなく、自分の椅子に座って頬杖を突いていた。

学校にいるのは楽だ。自分を殴るものも、罵声を浴びせるものもないから。

回りは尚人を空気のように扱っている。

ずっと椅子に座って、ボーっとしているだけで時間が過ぎていくくれる。

唯、一つ気になるのが、昨日の夜に、父から殴られた傷が痛むということ。

家には治療道具なんて無いし、尚人一人では病院に行くことはできない。

傷の痛みには堪えていると、チャイムが鳴り、やっと学校が終わった。尚人は傷の痛みには本当に堪えられなくなった時には、ある所に向かうのだ。

そこに行けば、傷の治療をしてもらえる。

「尚人君？今日はどうしたの？？」

とても綺麗な女性が尚人に話しかけた。

年齢は20代前半といったところ、真黒な長い髪で、巫女の格好をした女性が、心配そうな顔をして尚人に駆け寄って来た。

尚人は黙って俯いていると

「また怪我をしたのね。中に入りましょう。」

と言い、尚人の手を取り歩き始めた。

尚人が来た所は古びた神社で、尚人に話しかけた女性の名前は如月咲子。ここの跡取り娘なのだ。

「すみません。また、来てしまつて。」

尚人は消えそうなほど小さい声で言った。

「気にしないで、いつでも来て良いって言ったのは私なのだから。今日はどこに怪我をしたの？」

咲子は俯いている尚人に、優しい声で言った。

「ここ、です。」

と言い、自分の着ている洋服を捲り上げ、紫色に腫れた腹部を咲子にみせた。

咲子は一瞬驚いた顔をみせたが、また元の優しそうな顔に戻り手当てを始めた。

手当てをされながら、尚人は咲子に初めて会った日の事を思い出して居た。

あの日も今日と同じように、父に殴られた傷がとても痛み、堪えられなくなり学校帰りにある神社の石段に座って居た所を咲子に助けられたのだ。

「大丈夫？どこか痛むの？」
と。

咲子は尚人がみせた傷をみて、驚いた顔はしたものの、何も聞かずに治療をしてくれた。

そして、また怪我をしたらいつでも来ていいとも言ってくれた。

尚人はその日から咲子には度々お世話になっているのだ。

そんなことを考えていると、前々から疑問に思っていた事を咲子に聞いてみることにした。

「あの、咲子さんはなんで、見ず知らずの僕なんかの傷の手当てをしてくれるんですか？」

咲子は少し考えて

「唯、困っている人を放っておけないからよ。それにあなたは私を頼ってくれている。そんな人を見て見ぬ振りなんてできないわ。」
と言いながら微笑んだ。

本当に綺麗な笑みで、尚人は思わず魅入ってしまった。

「はい、終わり。」

咲子の声にハッとして我にかえり

「ありがとうございます。」

と言い、頭を下げた。

「明日もなるべく来るのよ。包帯を取り替えなければいけないからね。」

「はい、本当にありがとうございます。」

と言い、神社から出て行った。咲子は尚人の背中が小さくなっていくのを見守りながら

「あの子に、神の御加護がありますよう。」
と呟いた。

歩くだけで傷が痛むので、尚人は寄り道をせずに、真直ぐ家に帰る事にした。

玄関を開けると、そこには父の姿は無く、その代わりに姉、雅美の姿があった。

尚人は、なんで雅美が居るのだろうかなどと考えていると

「おかえり」

という声が聞こえた。尚人は驚いた。そんなこと言われたので初めてだったし、なにより雅美と最後に言葉を交わした日も覚えて無いくらいだ。そのまま呆然とたたずんでいると

「おかえり」

と、もう一度声がした。

幻聴ではないんだ、と思い尚人は慌てて

「た、ただいま。」

と言ったが、相当驚いていたせいでもってしまった。

雅美は柔らかい顔をして微笑んでいた。

「そんなところに突っ立ってないで座ったら？」

と雅美が言うので、尚人は雅美の側に座る事にした。

「き、今日は、会社には行かなくていいんですか？」

久しぶりに姉と喋れる と思い、尚人は雅美に話しかけてみた。

「うん。今日は行かないんだ。」

今まで、尚人に向けてきた冷ややかなまなざしとは違い、優しい口

調で微笑みながら言った。

「ねえ、尚人、あたし…」

雅美が何かを言い掛けた所で、父が帰って来た。多分お酒を買ってきたのか、パチンコにでも行ってきたのだろう。

父が帰ってきたので、尚人は別の部屋に行こうと立上がり、この部屋から出て行く去何やら2人の話し声が聞こえてきた。

何を話しているのかは分からないが、雅美の方は相当怒っている様子だった。

さつき、尚人にみせた笑みとは別人のように。

少し2人が言い合っていると、何やら大きい音が聞こえたのでドアを開けてみると、姉が手に持った包丁で父を刺していたのだ。父は刺された拍子に床に倒れた。まだ、意識はあるようだ。雅美は父の様子を確認し、父の体から包丁を抜き取り、もう一度思い切り刺し、また抜取った。父はウツ小さい声をもらし、そのまま意識を手放した。

「ああ、尚人。みてたのね。」

雅美は血に塗れた包丁を片手に、尚人に言った。

「な、んで」

尚人は腰が抜けて立ち上がれなかったが、大きく目を見開き、雅美を見上げていた。

「ごめんね、尚人。あたし、あなたのこと、愛してたのよ。大好きだった。だって、たった一人の兄弟だもんね。」

雅美は淡々と話していた。

「じゃあ…なんで？なんでお父さんを刺したりなんかしたんですか？」

尚人はなんとか声を絞りだした。

「この男は大嫌いよ。あたし、母の記憶が少しあってね。何があっ

たか知らないけど、この男が勝手に母を家から追い出したのよ。それからあたしはずっと母に会いたかった。この男なら居所を知っていると思ったから。

でも駄目だった。だから ね」

雅美は哀しそうな顔をしてそう言うと、床に包丁を置き、尚人に近寄り頭を撫でてから抱き付いた。

「もう、大丈夫。

きつと幸せになれるよ。」

と言うと、今度は尚人から離れ、床の包丁を拾い、自分の体に刺した。

床に手をつき、倒れこむと

「尚人とね、あたしが話してるとあの男は、急に怒りだすんだ。

多分それは、尚人が母に似ているからだね。尚人の笑ってる顔が、見たくなかったんだろうね。」

目に涙をため、苦しそうにそう言うと、雅美は自分の体から包丁を抜き、父にやった時と同じように、もう一度自分に刺した。

そんな様子をみても、尚人は何も言う事ができず、唯泣いているだけだった。

「笑って、尚人。

あたしは、尚人が、尚人の笑顔が大好き だから」
絞りだすように、荒い息で雅美は言った。

「おねえちゃん 死なないで」

尚人はやっこのことで、泣きながらそう言った。

「こんな姉でごめんね。」

と言い、一瞬微笑むと、雅美は目を閉じた。

「わああああ」

尚人は泣き叫んだ。父も死に、姉も死に、尚人は泣く事しかできなかった。

尚人の頭の中では、雅美の声が響いていた。
自分を好きだと言ってくれ、最後にごめん
最後に微笑んだ姉の顔が忘れられなかった。　　と言った姉の声が。
そして、尚人は生きようと思った。
姉の分まで、生きようと思った。
幸せになろうと思った。
ありがとう。

お姉ちゃん。

「僕も、好きだったよ。」

（後書き）

まだまだ初心者なので、おかしいところとかあるかもしれませんが、
申し訳ありません。

そして、読んでくださった方々、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4136b/>

哀哭

2011年1月27日04時11分発行